

# 発達障害の早期発見における1歳6か月児健康診査の役割

町田和世、清水美枝子、長澤詩子（長野市保健所健康課）

要旨：1歳6か月児健康診査は、幼児の健全な発育・発達の支援と育児支援を目的に実施されている。平成17年4月に発達障害者支援法が施行され、発達障害の早期発見と早期支援が地方自治体の責務とされる中、当市で実施している1歳6か月児健康診査がその機能を果たしているかについて検証した。その結果、長野市の1歳6か月児健康診査は、発達障害の早期発見に一定の役割を果たしていると考えられた。

キーワード：1歳6か月児健康診査、広範性発達障害、継続相談、ことば、指さし

## A. 目的

杉山は1歳6か月児健康診査で、1,000人に1人(0.1%)以上の自閉症のチェックがなされていれば最低ラインである。1,000人に2人(0.2%)以上の自閉症のチェックがなされていれば合格である。<sup>1)</sup>と述べている。

そこで、本研究では長野市が行っている1歳6か月児健康診査が、発達障害の早期発見という機能を果たしているかどうかについて検証する。

## B. 方法

### (1) 調査対象

平成9年度生まれ3,461人中、保健所で継続相談を実施し転帰を把握しているケース164件

### (2) 調査時期

平成16年7月1日～平成17年2月28日

### (3) 調査方法

- 1) 継続相談が必要と判断された時期について調査する。
- 2) 1歳6か月児健康診査で継続相談を実施した児について、既存のカルテから振り返り調査を行い分析する。

### (4) 倫理

個人を特定できないように、全て統計的に処理を行った。

### (5) 定義

継続相談：保健師が相談をおこない、発達相談員による相談が必要と判断し紹介して実施する相談

ことばの問題：対象児の発語が、単語で3個以下の場合

指さしがない：応答の指さしが見られない

課題：問診時に行う積み木、はめ板、指さしのあそび

課題にのらない：課題に興味をしめさない

## C. 結果

### (1) 継続相談が必要と判断された時期

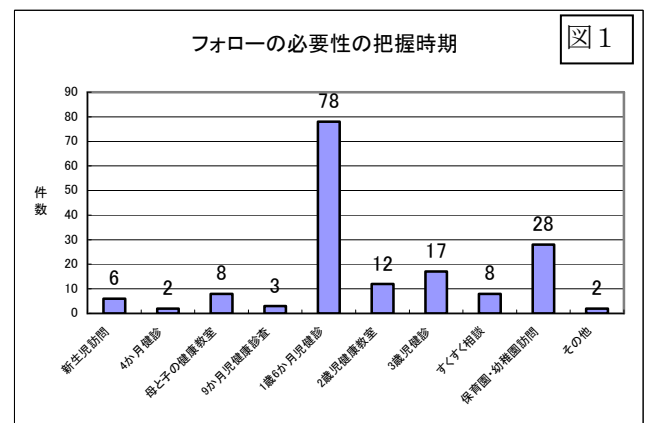
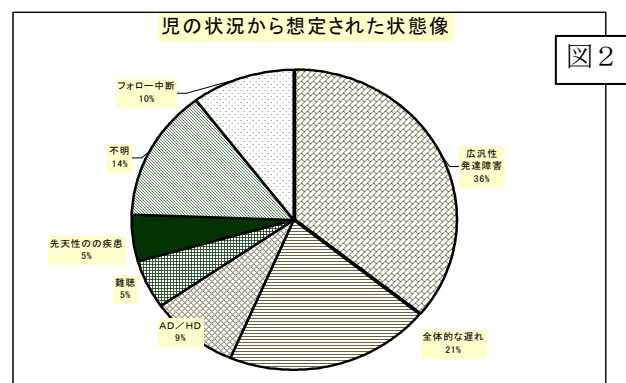


図1から、1歳6か月児健康診査で把握されている児が、78件(47.6%)で最も多かった。次いで、保育園・幼稚園訪問、3歳児健診の順だった。

### (2) 1歳6か月児健康診査で継続相談の必要性が把握された児の状態像の内訳

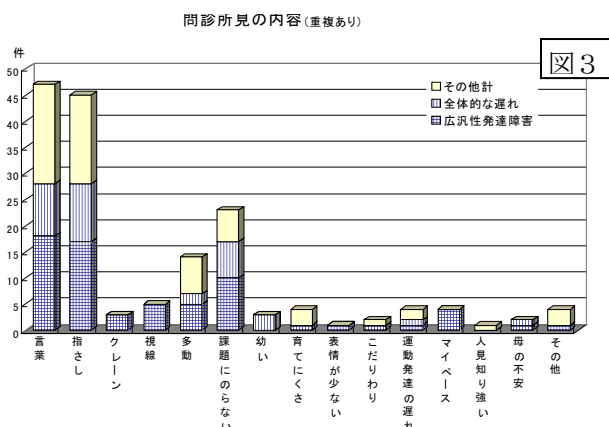


「広汎性発達障害（疑いも含む）」が最も多く 28 件（36%）を占めた。次いで「全体的な遅れ」が多く、16 件（21%）だった。

(3) 1 歳 6 か月健康診査で継続相談が必要と判断された問診所見

表 1 問診所見（重複あり）

所見	ことばの問題のみ	「ことば」と「指さし」の重複	指さしがない	その他の所見	合計実数
件数	20	27	18	13	78



「ことば」と「指さし」の問題で 83.3%を占めている。問診所見を疾患別に見てみると、広汎性発達障害の場合、「ことば」と「指さし」の問題以外にも「クレールン」「視線が合わない」「多動」「課題にのらない」「マイペース」等の所見がある。

D. 考察

今回の検討から、継続相談が必要なケースの把握は、78 件（2.3%）が 1 歳 6 か月健康診査で把握されており、内訳の 28 件（0.8%）が広汎性発達障害（疑いを含む）であった。この結果から、長野市での 1 歳 6 か月健康診査は、杉山のいう「0.2%以上の自閉症のチェックがなされていれば合格」のライン<sup>1)</sup>に達しているのではないかと考えられた。

1 歳 6 か月健康診査で継続相談が必要と判断された問診所見の 83.8%が「ことばの問題」または「指さしがない」であった。この 2 項目の所見がある場合は何らかの疾患の可能性を考えた対応が必要となってくる。また、この 2 項目の所見が

みられなくとも、「クレールン」「視線が合わない」「多動」「課題にのらない」「マイペース」など他の所見や会場内での児の様子も併せて確認していくことが必要と思われた。

F. まとめ

今回の調査では、長野市の 1 歳 6 か月健康診査が発達障害の早期発見の役割を果たしているのではないかと考えられた。

ただし、発達障害を早期発見したとしても、保護者の気持ちが必ずしもスタッフ側と同じとは限らず、支援は保護者の気持ちを大切にしながらすすめる必要がある。文献では<sup>2)</sup>、障害受容は、重症の発達障害よりも中等度、軽度のほうが困難であること、1 歳 6 か月健康診査でチェックを受ける児童のほうがさまざまな問題を生じやすいこと、両親の気づく以前に障害告知がおこなわれるというこの状況が障害受容プロセスに大きな影響を与えることが当然であることが示されている。

医療や療育の開始時期には、保護者の受け入れ状況も見極め、保護者と相談しながらおこなっていく必要があり、慎重さが求められる。健診をおこなう中で保護者に適切な情報を提供し保護者の気持ちに寄り添いながら、健診の精度アップを目指し、発達障害の早期発見から早期支援につなげていきたい。

【参考文献】

- 1) 杉山登志郎. 発達障害の豊かな世界. 第 1 版. 東京都: 日本評論社. 2001:p208~221
- 2) 日本小児科連絡協議会ワーキンググループ. 心と体の健診ガイド. 初版 2 刷. 東京都: 日本小児医事出版社. 2002